

小 論 文

注 意

1. 問題は全部で8ページである。
2. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. 解答用紙(その1)はマーク・シートになっている。HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	<input checked="" type="radio"/>	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	----------------------------------	---	---	---	---	---	---	---	---	---

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

以下の文章を読み、設問に答えなさい。なお、問1・問2・問3の解答は解答用紙(その2)に、また問4の解答は解答用紙(その1)に記入すること。

自由はどんな風土にでも実を結ぶわけではないから、すべての人民がこれを味わえるとはかぎらない。モンテスキューの立てたこの原理⁽¹⁾は、考えれば考えるほど真実だという感が強まる。これに反対すればするほど、次々と新しい証拠が出てきて、この原理を立証する機会がますますふえることになる。

世界中のどんな政府においても、公的人格なるものは消費するのみで何一つ生産しない。それでは、その消費される物質はどこからくるのか。構成員の労働からである。公共の必要物をつくりだすのは、個々人の剰余である。したがって、社会状態は、人々の労働がみずからの必要を満たす以上のものを生産する場合にのみ存続するということになる。

だが、この超過分は世界中のどの国でも同じというわけではない。ある国では大量であり、他の国ではわずかしかなかく、またゼロの国もあれば、マイナス値の国もある。この割合は、風土の肥沃度、土地が要求する労働の種類、その生産の性質、住民の体力、彼らが必要とする消費量の多少、およびこの割合に影響するさまざまな要素の類似の割合によって左右されるのである。

一方、すべての政府は、同じ性質のものではない。本来貪欲な政府もあれば、それほどでもない政府もある。さらにこの差異は、公共の税金は、その源泉から遠ざかれば遠ざかるほど、重い負担となる、という例の原則にもも⁽²⁾とづいている。この負担の計量は、課税額〔の多少〕によってではなく、税金がそれを払った人々の手に戻ってくるまでに要する道のり〔の長短〕によって測られなければならない。この流通が敏速で規則正しければ、納税額の多少は問題ではなく、人民はつねに富み、財政はつねに健全である。これに反して、人民の支払う額がどんなに小さくても、つねに払いっぱなしで、彼らに戻ってこない場合、人民はほどなく力を出し尽くしてしまう。国家はけっして富むことなく、人民はいつまでも貧しい。

以上のことから、人民と政府の距離が増すほど、それだけ租税は重荷となるという結果が出てくるのだから、民主政においては、人民の負担がもっとも軽く、貴族政に

においては、それが増大し、君主政においては人民はもっとも重い負担をにやう。それゆえ、君主政は富裕な国民にのみ適し、貴族政は富においても大きさにおいても中位の国家に適し、民主政は小さな貧しい国家に適する。

じっさい、このことを考えれば考えるほど、自由な諸国家と君主政国家との相違はここにあることがわかってくる。前者においては、すべてが共同の利益のために用いられ、後者においては、公共の力と個人の力とが相反的であって、一方が増せば他方は減ずる。つまり、専制政治は、臣民を幸福にするために彼らを統治するのではなくて、臣民を統治するために彼らを貧困にしてしまうのである。

そこで、これまでに述べてきたところから、おのおのの風土には、それぞれ自然的原因があつて、この制約のもとでは、風土の力に順応するのはどんな統治形態であるかを定めたり、この風土にはどんな種類の住民がふさわしいかを語ったりすることさえできるのである。生産物が労働に引き合わないような、働きがいのない不毛の土地は、未墾のまま荒れるにまかせておくか、それともせいぜい原始人に住まわせておくべきである。人々の労働が、生きてゆくのに必要なものだけしか生まない土地は、野蛮人に住まわせるべきである。そのような土地では、いかなる^{ポリテイア}国家組織も成り立たないであろう。労働に対する生産物の過剰が中位の土地は、自由な国民に適する。土壤が豊かで肥えており、わずかの労働に対して多くの生産物を与える土地は、君主政によって統治されることを望んでいる。臣民の過剰生産物を、君主が奢侈によって消費することに向いている。なぜなら、この過剰物は個々人によって浪費されるよりも、政府に吸収されたほうがまだからである。もっとも、例外があることは、私も知っている。しかし、これらの例外そのものが、この規則を裏づける。というのは、そうした例外は、遅かれ早かれ革命を生みだし、事物を自然の秩序に引き戻すからである。

一般的法則と、その法則の結果を変更しうる特殊的原因とを、つねに区別しよう。たとえ南方の全土が共和国でおおわれ、北方の全土が専制国でおおわれているとしても、風土の効果から言えば、専制政治は暖かい国に適し、未開状態は寒い国に適し、その中間地帯に、よい政治組織が適するということが、真理であることに変わりはない。だがまた、この原則には同意しても、適用に異論がある、という意見があることは、私も承知している。すなわち、きわめて肥沃な寒冷の国もあれば、きわめて不毛

な南国もある、と言えよう。しかし、この難問は、事態をあらゆる連関のもとで検討しない人々にとってのみ、難問であるにすぎない。すでに述べたように、労働、体力、消費、等々のさまざまな連関を考慮に入れなければならないのである。かりに、面積の等しい二つの土地があって、その一方は五の、他方は十の収穫をもたらすとしよう。もし、前者の住民が四を消費し、後者の住民が九を消費するとすれば、前者の生産物の過剰分は五分の一、後者の過剰分は十分の一となる。したがって、両者の過剰分の比は生産物の比の逆であって、五しか生産しない土地が十を生産する土地の二倍の剰余を生み出すことになる。

しかし、〔一方の他方に対する〕二倍の収穫については、問題とするに及ばない。じっさい、寒い国は一般に暖かい国とくらべてさえ肥沃度の点で等しいと、あえて仮定する人は一人もなかろうと思う。しかし、かりに、これが等しいとしよう。お望みなら、イギリスがシチリア島と、ポーランドがエジプトと、同程度だとしておこう。エジプトより南がよければ、アフリカとインド諸島があるが、ポーランドより北にはもう何もない。ところで、この同じ生産高を上げるのに、なんと耕作方法の違うことか。シチリア島では、地面を浅く耕すだけで十分なのに、イギリスでは土地を耕すのになんと手数がかかることだろう！ さて、同量の生産物を得るのに、人手を余計に要するところでは、剰余は必然的に少ないはずである。

なおそのほかに、暑い国では、同じ数の人間でも消費量のはるかに少ないということも考慮に入れていただきたい。そこでは、人は健康を維持するために、飲食を節制することを、風土から要求されている。この国で本国同様の生活をしようとするヨーロッパ人は、ことごとく赤痢や消化不良で死んでしまう。シャルダン⁽³⁾は言う、「われわれはアジア人に比べれば、肉食獣であり、狼である。ペルシア人の節食は、彼らの国が他国ほど耕作されていないせいだと言う人がいる。しかし、私は逆に、ペルシアに食料が乏しいのは、住民が他国ほどにはそれを必要としないからだと思う」と。彼は続けて言う、「もし彼らの粗食が、この国の食糧不足の結果だとしたら、貧者だけが少食なはずだ。ところがじっさいは、だれもが一様に少食である。また、各地方の土地の豊かさに応じて、多食のところも、少食のところもあるはずだが、じっさいは王国中どこへいっても同じように節食が行なわれている。ペルシア人は彼らの生活様式をたいそう誇りにしており、それがキリスト教徒の生活様式よりもいかにすぐれて

いるかは、彼らの顔色を見るだけでわかる、と言っている。たしかに、ペルシア人の顔色はむらがなく、皮膚は美しく、きめが細かでつやがある。ところが、彼らの属国民で、ヨーロッパ風の生活をしているアルメニア人の顔色は悪く、吹き出ものだらけだし、からだは肥満して鈍重である」と。

赤道に近づけば近づくほど、民族は少食である。彼らはほとんど肉を食わない。米、とうもろこし、もろこし [=たかきび]、粟、それにタピオカが、彼らの常食である。インド諸島には、一日の食費が一スー⁽⁴⁾もかからない数百万の人々が住んでいる。ヨーロッパにおいてさえも、北方の人民と南方の人民とのあいだには、食欲において著しい相違が見られる。スペイン人なら、ドイツ人の一回分の正餐で、一週間も生きてゆけるだろう。人間が食欲旺盛な国々では、奢侈は飲食物のほうへも向かう。イギリスでは、奢侈は肉類を盛りあげた食卓に示される。イタリアでは、砂糖と花で客をもてなす。

衣服の奢侈にも、似かよった違いがある。季節の変化が速く激しい風土では、着物は良質で簡素である。着飾るためだけに着物を着る風土では、実用よりも華美が求められる。そこでは衣服をまとうこと自体が、奢侈の意味を持つ。ナポリでは、金の部品のついた上着なのに靴下もはかず、といった身なりの人々が、毎日ポジリッポ⁽⁵⁾を散歩しているのが見られるだろう。建物についても同じことである。外気によって健康を害するおそれがあったくない場合は、豪華ということだけが配慮される。パリやロンドンでは、暖かくて居心地のよい住居が喜ばれる。マドリッドでは、豪華な客間はあるが、外気を遮断する窓は一つもなく、寝室はねずみの巣窟同然である。

食物は、暖かい国のほうがはるかに栄養があり美味である。これが第三の相違だが、第二の相違に影響を及ぼさずにはおかない。イタリアでは、なぜあんなに多くの野菜を食べるのか。それは、その野菜が良質で、滋養に富み、非常においしいからである。フランスでは、野菜は水だけで育てられるから、少しも栄養にならず、食卓では、ほとんど物の数に入っていない。しかも、これを栽培するのに要する土地は、小さくてすむわけではなく、また、少なくとも同じ程度の労力がかかる。〔北アフリカの〕バルバリア地方の小麦⁽⁶⁾は、他の点ではフランスの小麦に劣っているが、小麦粉はずっとたくさんとれるし、そのフランスの小麦は、北方の小麦にくらべればたくさん小麦粉がとれる、ということは実験済みである。このことから推論して、赤道から

極地へ向かってゆくと、一般にこれと同様の段階が見られる、ということが出来る。ところで、同量の生産物から、より少ない食物しかとれないということは、明白な不利ではないだろうか。

これらのさまざまな考察に、いま一つをつけ加えることができる。これは以上の考察から出てくるものだが、同時にそれらを補強するものでもある。それは、暖かい国は寒い国よりも住民を必要としないのに、より多くの住民を養いうる、ということだ。このことが二倍の剰余を生みだし、つねに専制政治に有利となる。同数の住民でも、広い面積を占めれば占めるほど、反乱は起こしにくくなる。なぜなら、人民は敏速に、秘密裡に集合することができないし、また政府にとっては、計画をかぎつけ、連絡を断ち切ることがいつも容易だからである。しかし、多くの人民が密集していればいるほど、政府が主権者の機能を横領することはできなくなる。人民の首領たちは、御前会議における君主と同じくらい安全に自分たちの部屋で協議するし、また群衆は、軍隊が兵營に集まるのと同じくらい迅速に広場に集まってくる。だから、圧制的な政府にとっての利点は、遠いところから働きかけうる、ということにある。政府の力は遠くに設けられた拠点の助けを借りて、あたかも挺子の力のように、対象が遠ざかるにつれて増すのである。これに反して、人民の力は、集中しなければ発揮されない。それは拡散すると、地面にまき散らされた火薬が、一粒ずつしか発火しないのでさっぱり効果がないように、雲散霧消してしまう。こういうわけで、人口密度のもっとも低い国が、圧制にもっとも適している。猛獣は荒野においてのみ君臨する。

註

- (1) 『法の精神』のなかで風土の研究にあてられた諸篇に言及している。
- (2) 『社会契約論』第9章で行った議論のこと。
- (3) シャルダン (1643-1713年) は有名な『ペルシア旅行記』(1735年)の著者。
- (4) 「スー」は、当時のフランスの通貨単位。
- (5) ナボリの遊園地。
- (6) エジプトから大西洋にいたるアフリカ大陸北岸の諸国。

出典：ジャン＝ジャック・ルソー、2010年、『社会契約論』作田啓一訳、白水社
(原著は1762年)

問 1

本文の主張を 200 字以内の日本語で要約しなさい。

問 2

問 1 で要約した主張に対する論理的な反論を 200 字以内の日本語で述べなさい。

問 3

問 1 と問 2 を踏まえた上で、あなたはどちらの立場に立つか表明し、それを現代の具体的な事例をあげながら 300 字以内の日本語で展開しなさい。

問 4

いかなる風土にいかなる統治形態がふさわしいかという問題は、あたえられた自然に対して政治がもっとも適切に関わるにはどうするべきか、ということでもある。現代の地球環境問題に対する国際社会の取り組みもまた、そのような文脈で理解することができるだろう。

これに関連して、次の文章の空欄 ～ にあてはまる最も適切な語を、下の語群の中からそれぞれ選び、その番号をマークしなさい。ただし、

1. 同じ番号の空欄には同じ選択肢が入る
2. 語群には正解と無関係な選択肢も含まれている
3. 一桁の番号の選択肢を選ぶ場合は、十の位に「0」をマークすること

凡例 空欄 の解答として選択肢 4 を選ぶ場合 → 04 とする

21	<input type="radio"/> ① <input type="radio"/> ② <input type="radio"/> ③ <input type="radio"/> ④ <input type="radio"/> ⑤ <input type="radio"/> ⑥ <input type="radio"/> ⑦ <input type="radio"/> ⑧ <input checked="" type="radio"/> ⑨
22	<input type="radio"/> ① <input type="radio"/> ② <input checked="" type="radio"/> ③ <input type="radio"/> ④ <input type="radio"/> ⑤ <input type="radio"/> ⑥ <input type="radio"/> ⑦ <input type="radio"/> ⑧ <input type="radio"/> ⑨

地球環境問題を取りあげた最初の国際会議は、「かけがえのない 」というスローガンのもと、1972年に で開催された国際連合 環境会議である。この会議で採択された 環境宣言は、「 環境の保全と向上に関し、世界の人々を励まし、導くため共通の見解と原則が必要」としている。また1992年には、 において、環境と に関する国際連合会議、通称「 サミット」が開催され、 可能な を第1原則とする「環境と に関する 宣言」、およびその実施工動計画である「 」などが採択されている。さらに、1997年には地球 防止京都會議が開催され、京都議定書が採択された。これは、2008年から2012年にかけて ガスの排出削減を義務づけた条約である。京都議定書は2020年まで8年間延長されることになった一方、2015年には 協定があらたに採択されている。

語群

- | | | |
|----------------|-----------|--------|
| 1. アジェンダ 21 | 2. ブリュッセル | 3. 地球 |
| 4. COP3 | 5. G20 | 6. 持続 |
| 7. 開発 | 8. 公害 | 9. 共生 |
| 10. ラムサール | 11. ミュンヘン | 12. 人間 |
| 13. 温室効果 | 14. 温暖化 | 15. パリ |
| 16. リオ・デ・ジャネイロ | 17. 再生 | 18. 生物 |
| 19. ストックホルム | 20. UNEP | |